



<同志社人が母校を誇りに思える情報>

「同志社ファン・レポート」(通巻 292 号)

## 「教育者・新島襄」 -10-

### 卒業生の新島回想 ・ 新島の遺言

井上勝也同志社大学名誉教授



#### ◆卒業生の新島回想

新島がどのような教育者であったか、そして当時の同志社英学校がどのような状況にあったかについて、新島に直接学んだ学生の生の声を聞いてみようと思います。

明治 12 年から 17 年まで 5 年間同志社英学校で学び、後年早稲田大学の教授になりました安部磯雄は授業中、新島から次のようなエピソードを聞いたと申しております。それは新島がアメリカに留学中、ボストンの街を歩いていたとき、一人の婦人が街を横切ろうとして、疾走してきた馬車にひかれそうになった。傍を歩いていた一人の男性がすばやく婦人を抱きしめたので事無きをえたが、やがて婦人の夫と思われる人が来て、その男性に

“You are gentleman” といって感謝した。新島はこの例を挙げて、紳士とは人の為に奉仕する人を意味することを教えたといひます。安部はこのように書いた後、「こんな精神で同志社の学生は薫陶されたのである。」(安部磯雄著『社会主義者となるまで』p.84) と結んでおります。明治 13 年入学し、一年で退学、再入学して明治 22 年に卒業した柏木義円、彼は明治 25 年、井上哲次郎と〈教育と宗教の衝突〉に関する論争をおこない、明治 31 年から 38 年間刊行しつづけた「上毛教界月報」でキリスト教の立場から終始非戦論を主張した人物ですが、彼は明治 40 年 1 月の同「月報」で「故新島襄先生を懐ふ」と題して、彼の学んだ当時の同志社を次のように語っています。

我儕新島先生時代の同志社に在て飽く迄其自由教育の空気を呼吸したものは今の官学の遣り口には実に堪へ難い思ひが致します。私は明治 10 年前後東京の官立学校(東京師範学校のこと一筆者注)にも居り又私塾にも居りましたが、其生徒の談ずる所は女の話でなければ将来社会に出た時の月給の話でありました。然るに同志社へ来て見れば更に此

の如き事を口にするものなく、日本の改革を以て自ら任ずるの意気が盛んであって、実に清浄なる別世界に來たやうな心地が致しました。学校内には各級毎週演説会があり、新聞もありまして、特に演説会を開いて食堂問題を論じたり、時には大いに学校の処置を弁難し、当局者を攻撃することもあります。(中略) 当時の同志社は人格と学力とを以て生徒を服するの外何の力も頼まないのでした(「上毛教界月報」第 99 号)。

明治 9 年より同 13 年まで学んだ徳富猪一郎(蘇峰)は自責の杖事件の首謀者としての道義上の責任をとってか、卒業を間近かにして退学しました。彼はジャーナリストとして「国民之友」を発刊、平民主義を説き、生涯にわたって新島のよき弟子であらうとしましたが、新島を次のように語っています。

筆者は毎日此の朝礼に出席することを大なる楽しみとした。それは近くに新島其人を見ることが出来たからである。新島の朝五分間の訓話や、学生心得書の朗読は、兎も角も、新島其人を見ることが予に取っては一種の感激即ちインスピレーションであった。新島は別に豪傑振らず、学者振らず、仙人でもなければ、聖者でもなく、但だ一個の平凡なる普通人であるが、然も彼の風格は、そくそくとして人を動かすものがあつた。筆者は彼の風格に接する毎に、人間としては斯ある可きものである、斯あらねばならぬものであると考へ、常に今も猶其の印象が鮮かに胸間に生きて居る様な心地がする(徳富蘇峰著『三大人物史』(pp. 517-518)。

明治 20 年に神学校を卒業し、後年早稲田大学で哲学、倫理学を教えた岸本能武太は「要するに新島先生は頭脳明晰と云ふ方の人ではなかつたと、私は今も信じて居る。」(『創設期の同志社—卒業生たちの回想録』 p.24)と述べています。明治 20 年代前半に普通科を中退しましたが、在学中「コリント人への第一の手紙」の愛の実践者たらんとして、山室軍平に経済的援助を惜しまなかつた吉田清太郎は新島を次のように回想しています。

新島先生は私共の級には、聖書の研究と米國史をもつて居られたが、級中一番出来な  
いと思ふ様な人を非常ニ大事ニせられた。先生の御宅へ行つたりするといろいろ御話を  
せられ、歸へる時には玄関から門の処迄 20 間位もある処を出る迄ぢつと見送つて居られ  
る。(中略) 私は、後ニ東京へ出て來て勝海舟ニ遇ふたが、先生とは全く別な感じを以 [持]  
つた。非常ニ権謀を用ふるから思ふた儘を言はしめない。それニ反して先生は、どんな事  
でも充分ニ相手の考へを言はしめる。こゝが非常ニ違ふ処で、つまり新島先生は全く至  
誠の人であつたのである(『創設期の同志社』 p p.276-7)。

新島自身同じことを書いておられて、彼は明治 17 年、欧米旅行中、イタリアで書いた日記の一節に、

もし、私か再び教えることがあれば、クラスで一番劣つた学生に特別の注意を払おう。  
そうすることができれば、上出来の教師になることができると思う。

(*LIFE AND LETTERS* p.262)

と書いています。

新島は、教育空間を狭く教室や学校に限定せず、よく学生を自宅に招き、食事を共にしています。時には妻にも応援を求め、広く学生との人間的な交わりを大切にいたしまして、次のような手紙を書き送っています。

……書生が遊びに参り候はゞ、何卒丁寧に御取扱い下され、成る丈御馳走もなし下され度く候。彼等は実に大切な人物に候間、大切に取扱い申し度く候（『新島襄書簡集』 p. 250）。

明治 21 年普通科を卒業し、洋画家となって新島の肖像画を描いた湯浅一郎は、新島宅に招かれてご馳走になったことを次のように回想しています。

新島先生の家には、帰省する時、又は正月には呼ばれて西洋料理を馳走になったが、キャベジマキ、オムレツ、ピフテキ等の様な、今日では余り結構でないものを悦んで食べた。チーズは不味ものだと思って食べ無かったら、是は西洋料理を食べる時は必ず食べなければなら無いものだと先生から云われた（『創設期の同志社』 p. 99）。

最後に、明治 20 年に普通科を中退して慶応義塾に転校した池田寅次郎は、教育者福沢諭吉と新島を比較して次のように述べています。

新島先生の家には時々夜遊びに行ったが、先生は其度毎に、遊学して居る愛児が帰って来たかのように、始終温情を披瀝し、諒々として人生観を物語られた。特に私の如き苦学生に対し、多大の同情を傾注せられた。私は後慶応義塾にも学び、福沢先生にも其私宅に於て暫々〔屢々〕親しく教えを受けたが、両先生が学生に対する薫陶方は非常なる対照が有り、何れも教育の大家だけに学生の服膺す可き事柄で有るが、簡単に両先生が学生に対せられたる其真情を云ふと、福沢先生は人を見て法を説くと云ふ實際的で、新島先生は一死同人〔一視同仁〕で何処迄も其学生をして進歩発展せしむる様に厳〔激〕励を加へられた。

新島先生は一見、大事には細疵を顧無いと云ふ様な風で、万事に大様な処が有ったが、細大悉く前後左右より真〔慎〕重なる考慮を以て、着々万事を裁断せられた（『創設期の同志社』 p.145）。

以上のような卒業生の回想を総合しますと、当時の同志社英学校は 19 世紀後半のアーモストーカレッジを彷彿させるものがあります。新島は日本人の権威主義的な思考様式を好まず、言動において民主主義に徹していました。森有礼文部大臣が上からの権威でもって教育をおこない、従順、友愛、威重の気質をもった教育者の養成を目ざしていた同じ時代に、新島は「独自一己の見識を備へ、仰いで天に愧ず、俯して地に愧じ」ない「自治自立の人民」（「同志社大学設立の旨意」 pp.137~8）の養成を誇りとしていました。彼は徹底的にイエスの心を心として生きた人でありました。高き志の実現に激しい情熱を燃やし、誠実で忍耐強く、他者を思う心が豊かでありました。彼は学生の価値可能性を信じ、個性を大切に、クラスの中で「いと小さき者」に配慮し、彼らを極みまで愛した教育者であったといえましょう。

## ◆ 新島の遺言

だいぶ時間が経過しておりますので、次に新島の遺言をご紹介します、教育者新島を理解する一助にしたいと思います。彼は 1890 (明治 23) 年、同志社大学設立の夢を果たしえないまま、47 歳の若さで亡くなりますが、亡くなります二日前の 1 月 21 日、妻や徳富蘇峰、小崎弘道を枕頭に呼んで、次のような遺言をいたしました。

同志社の前途は基督教の徳化、文学政治等の隆興、学芸の進歩三者〔相伴ひ〕相待て行ふ可き事

同志社教育の目的は其の神学政治文学科学等に従事するニ係らず皆精神活力あり真誠の自由ヲ愛し、以て邦家ニ尽す可き人物を養生するを務む可き事

社員たるものハ生徒ヲ鄭重ニ取扱ふ可き事

同志社ニ於てハ憫憫不羈<sup>てきとうふき</sup>なる書生ヲ圧束せず務めて其の本性ニ従ひ之ヲ順導し以て天下の人物ヲ養成す可き事

同志社は隆なるニ従ひ機械的ニ流るゝの恐れあり切に之を戒慎す可き事 (『同志社百年史』資料編 1 p.709)

私学同志社はこのような教育者新島襄によって、112 年前に創設された大学であります。■